図書館教育

香川県学校図書館協議会
高松市前田東町 690-1
香川県立高松東高等学校
２０１７．３ NO.127･128 合併号

伝えたい読書の大切さとその方法

香川県学校図書館協議会 会長　**佐　藤　良　二**
(香川県立高松東高等学校　校長)

香川県は『香川県子ども読書活動推進計画』に基づき、家庭、地域、学校が連携して、子どもたちが読書に親しむ環境づくりや読書活動の意義や重要性について普及啓発に努めてきました。その結果、小学生までは読書量が順調に増加し､多くの県民も理解と関心を示すようになりました。その一方で、中学校、高校と学年が上がるにつれ読書量が減少するという課題が見えてきました。その課題解決の一環として、昨年１１月レクザムホールにおいて、香川県教育委員会と香高研図書館部会共催で､「本との出会い応援事業『第１回高校生書評合戦（ビブリオバトル)』」を開催しました。

このビブリオバトルの趣旨でもありますが､大切な「人」との出会いがあるように、優れた「本」と出会うことはその後の成長にとって大きな力となります。ビブリオバトルは、言葉の力や表現力によって本の魅力やおもしろさを共有して読書活動につなげていく、優れた本との出会いを応援する取り組みです。当日は勉強や部活動にたいへん忙しい中、8 校から計 12 名の生徒がバトラー（出場者）として参加してくれました。また、観戦者として学校関係者だけではなく一般を含め 100 人ほどの参加がありました。バトラーがお薦めの本について５分の持ち時間の中で面白いと感じたり、感動したりしたところや読みどころを、身振り手振りを交えて紹介しました。そして、観戦者が最も読みたいと思った本に投票するという形式で「チャンプ本」を決定しました。参加した生徒たちが本をよく読み込んでおり、また、書評の内容やスピーチもしっかり練習していましたので、どの発表も素晴らしく、熱のこもった戦いとなりました。観戦者も熱心に聞き入っており、質問コーナーでも積極的な質疑応答がなされました。読書離れといわれる中、開会前の予想に反して多くの観戦者の参加や熱い戦いに、「高校生、結構やるな。」と感心し、これからもこの取り組みが続くことを願いました。

私は、現代はものの豊かさを求める時代から心の豊かさを求める時代になってきたと思っています。確かに便利な時代にはなったものの、毎日のように報道される凶悪犯罪や一部企業や政治家の不正行為､学校現場のいじめ問題等、心がさみしくなるような出来事がたくさん起きています。国外に目をやると不安定な経済情勢に加え、移民や難民問題等の国際問題と､ある意味生きにくい時代だと思います。そんな時代を強く、そして、幸せに生きていくためには、我々はやはり原点に返って教養というものをしっかりと身につけなければならないと思います。その教養とは、専門的な知識や技術だけではなく、スポーツや芸術、ボランティア活動などによって培われた感動する心や人間同士の魂のふれあいを含んでいなければならないと思います。「すばらしい」､「美しい」と心を動かされる感性が人としての軸を作るのです。混沌とした現代だからこそ必要になるものでしょう。その意味においても、作者や筆者の思いを受け止め咀嚼し、自分の考えを持つ、あるいは他者に感動を伝えていける読書はたいへん意義のある知的活動と言えるのではないでしょうか。

ここに、教育の重要性や読書の大切さを分かった上で、読書方法について語っている歴史上の人物を紹介します。明治から昭和の初め、近代日本の黎明期に日本の教育の在り方の指針を示された新渡戸稲造先生です。「混乱の世の中」において国民の進むべき方向性を示し、特に国民の教育の重要さを説かれ、その中で読書の大切さを強調された。先生が書かれた『修養』の中に「余が実験せる読書法」として『多忙の人が利益を受ける読書法』について述べた件があります。「毎日 5 分でも 10 分でもよい、必ず時間を決めて書物を読む習慣をつくりたいと思う。」また、「懇意なる友人たちがお互いに相集まって読書会を開くこと。各自が平生読んだ書物の梗概を談話する。」等を勧めています。最初の部分は、まさにいくつかの学校で取り組んでいる「朝読」に相当します。短時間の読書は、家庭生活においても比較的習慣化しやすいものでしょう。後の部分は「ビブリオバトル」や、学活やロングホームルーム等で行われている「本の紹介（スピーチ）の取り組み」がこれに当たるかも知れません。友人同士で紹介し合うと一度に多くの本の知識を得ることができ、その中から読みたい本を見つける良い機会になります。新渡戸先生の書かれた文章からは、いつの時代においても読書は人格形成において大切な知的活動として高く認識され、その必要性を広く訴える啓発活動が行われていたことが分かります。

現代は情報端末の著しい発達に伴い、インターネット等を通じて苦労することなく知識の習得ができるようになっています。しかし、人間が人間らしく生きていくために必要な価値ある知識（教養というもの）は、時間をかけ努力をしながら読書や人との触れ合いの中で育まれていくものだと思います。先にも述べたように、現代は考え方によっ

ては生きにくい時代、つまり「混乱の世の中」のようなもの、先人の知恵を見習って読書の大切さを再認識したいものです。そして、私たち教育に関わる者は、子どもたちに読書の大切さやその方法を伝えていくことが必要不可欠となり、その取り組みを達成するためにも学校図書館がその機能を発揮できるよう、常に環境整備を進めていかなければなりません。子どもたちの未来を担う図書館という「宝箱」を、私たちはこれからもしっかりと育てていきましょう。

第 40 回全国学校図書館研究大会（神戸大会）

2016 年 8 月 8 日～10 日

参加報告

デジタル教材と学校図書館～学校図書館のＩＣＴ活用～

土庄町立土庄小学校　司書教諭　**岡　亨**

今回の学校図書館の全国大会は、平成 28 年 8 月 8 日から 10 日までの 3 日間、神戸の地で開催された。

初日の全体会場で、早速、香川県学校図書館協議会会長で高松東高等学校の佐藤校長先生と事務局の山本先生と四国学院大学田中教授にお会いすることができた。また、全国学校図書館協議会会長（東京国立博物館館長）の銭谷眞美氏にもご挨拶することができた。全国大会では、いろいろなすばらしい方と出会えることが一番の楽しみである。そして、神戸国際展示場での開会式では、学校図書館を「学校教育の中核の担う場」にというお話があり、「まさに、その通りである！」と感銘を受けた。

大会テーマは、「『アクティブ・ラーニング』を支える学校図書館の役割」。「今、教育界で話題になっている学習手法である「アクティブ・ラーニング」を取り上げ、能動的な学習意欲を高めるために、学校図書館がどのように役立つのか、またどのようなことができるのかという可能性を探ることを目的として、講義、報告、ワークショップ、実践発表等さまざまな視点からのアプローチが行われた。

８日、私は、午後からの分科会 0－①「デジタル教材と学校図書館」で発表した。東京学芸大学對崎奈美子特任教授に司会をしていただいた。教授は、「デジ読」の仲間である。

私は、平成 24 年から東京学芸大学の「デジ読評価プロジェクト実践研究協力校」の実践者として、学校図書館の視点からデジタル教科書や教材・機器を活用した授業づくりを推進してきた。今回、神戸の地で、「デジ読」実践研究の様子の実例を示しながら発表した。

発表が終わり、「デジ読」拡大評価委員の一人で、全国学校図書館協議会参事の山田万紀恵先生の発表「学校図書館ボランティアとの連携」の講義を聞きにいった。「学校図書館ボランティアへの期待」（全国学校図書館協議会）の著者である。その帰り、デジタル新聞データベース「朝日けんさくくん」の担当者の方にもご挨拶に伺った。

２日目は、シンポジウム「アクティブ・ラーニングを支える学校図書館の在り方」（全国学校図書館協議会理事長森田氏、文部科学省初等中等教育局児童生徒課長坪田氏、島根県学校図書館協議会会長飯塚校長、琉球大学望月氏、広島大学山元氏）や著者との対話「本を通して子どもたちに伝えたいこと」（作家あまんきみこ氏）、講義「文部科学省の学校図書館施策」（文部科学省初等中等教育局児童生徒課長坪田知広氏）学校図書館施策トップの方のお話をお聞きした。

お話を聞き、全教科・領域において「アクティブ・ラーニング」を行っていくこと、授業改善・授業改革を行うこと、そのためには、ICT 教材等、最近のメディアをフル活用して、様々なビジュアルを活用した特色のある授業を行っていくこと、一斉授業でない 10 年前と同じ授業ではない授業にチャレンジすることが求められていると感じた。そして、学校図書館をフル活用できる学校が求められていることを再確認できた。教育するものからの学びの転換が大切であり、アクティブ・ラーニングには、型や方法はなく、まさに教師自らが考え、探究していく姿勢こそ大切であることをも再認識した。

学校図書館やデジタル教材活用において、教員や児童に温度差は当然あるが、学校図書館は大きな役割を担っているので、少しでも、有効な活用ができるような環境づくりや啓発を行っていきたいと感じた。そのために、まず自らの授業改善を通じて、学校の要としての学校図書館を形づくりたいと強く思った。

３日目は、講義「絵本の読み聞かせの効果」（鳴門教育大学余郷裕次氏）は、本校、40 名弱の図書ボランティアの方々や学校司書さんに紹介したらいいなあと思い、参加いたした。講演「作品で伝えたいこと」（作家中川なをみ

氏）は、伝えたいこと（強い印象・感動）をいかに効果的に伝えることができるか（文章の技術）について勉強になった。

終わりに、この大会で学んだことを生かして、学校図書館が学習・情報センターとしての機能を充実させ、それらのメディアの利活用することで、次期指導要領で展開されるであろう、アクティブ・ラーニング的な授業を企画・実践していきたい。「学ぶことが楽しい！できた！身に付いた！」という成就感があり、子どもたちが目を生き生きと輝かせた授業は、タブレット端末やデジタルコンテンツなどの、この新しいメディアをいかに状況に合わせて活用・実践していくかにかかっている。今後も常にチャレンジ精神をもち、司書教諭として前向きに学校図書館の立場からの新しい授業提案をしていきたい。

小豆島の中核となる学校という自負の下、全国トップクラスの人的・物的環境を目指している土庄小学校において学校図書館を学校教育の中核の担う場にしたい。

【参考図書・参考 Web サイト】

「学校図書館 2016 年 8 月号」（全国学校図書館協議会）

「指導者用デジタル教科書活用実践事例集」（啓林館）

「算数ドリルアプリ『やるＫｅｙ』」（凸版印刷）

（http://www.yarukey.jp/casestudy.html）

「アクティブラーニングマップ」（マピオン）

（http://blog.mapion.co.jp/release/2016/10/161012_30577.html）

「毎小ニュース＆漢字ドリル」（イースト）

（http://www.est.co.jp/press/161220）

「学校図書館げんきフォーラム」（読売新聞社）

（http://katsuji.yomiuri.co.jp/event/other/post_21.htm）

「花まる先生　公開授業」（朝日新聞社）

（http://www.asahi.com/edu/hanamaru/）

「新聞で学ぼう　ICT 教育進める小豆島」（毎日新聞社）

（http://mainichi.jp/articles/20160216/ddm/013/100/021000c）

「デジ読評価プロジェクト」（東京学芸大学）

（https://sites.google.com/site/dejidoku/）

参加報告

全職員とタイアップする学校図書館教育

香川県立高松商業高等学校　図書館司書　**熊野明美**

平成 28 年 8 月 8－10 日、神戸国際展示場、神戸学院大学を会場とし開催された全国学校図書館研究大会。今回は「アクティブ・ラーニングを支える学校図書館の在り方」ということで能動的な学習意欲を高めるために、学校図書館の可能性を探ることを目的とした 100 ブースを超える講義や実践報告、ワークショップ等が設けられました。

学んだこと全てをご報告することは不可能ですので、特に印象に残っている点を列挙してみます。

①研究討議：図書委員会スタッフマニュアルの作成と活動」

創立 116 年目になる茨城県立水戸第二高等学校は、昨年、生徒数 960 名に対し国公立大学 147 名を輩出しています。ＳＳＨに３期指定されています。これまで「としょかん通信」「教育家庭新聞」などでも図書館が取り上げられるほどの優秀実践校です。ＳＳＨ指定校の後押しもあり、学校図書館を活用した探求的学習がスムーズに行われています。そんな中、大学の卒論を書くために卒業生がやってきたことをきっかけに改めて「図書委員会活動」について考えることに。図書館の意義や分類の目的、法律に至るまで図書委員にも分かり易くパワーポイントで解説することを試みました。図書館への高い意識は、クラスへも共通認識され、校内の生徒が図書館へ関心を寄せ、情報や書籍を使いこなせる能力を高めているという流れを生み出しています。東日本大震災を経験した生徒たちにとって、図書館等で「学ぶ」ことへの意識も違ってきたと言います。図書委員会という、しっかりとした組織構築は学びにとても大きな影響を与えています。

②シンポジウム：アクティブラーニングを支える学校図書館の在り方

全国ＳＬＡ、文部科学省、大学関係者、計５名による３時間に及ぶ公開討論会でした。討論の中で印象的だった点をご紹介します。「アクティブラーニング（ＡＬ）を支える学校図書館とは、安心できる居場所であり、学校内の読書環境デザインを整えた豊かな学びを支える場であること」「あらゆる蔵書をバランス良く揃え、先生方を巻き込むこと」「１人１台のタブレットを早く整備すること」「優れた図書館には校長のマネジメント力、リーダーシップ力がある。何もしない先生が得をし、できる先生がバカを見る、これではいけない」「ＡＬという方法は存在しない。それは授業者が自ら考え導き出すもの。ＩＣＴ活用についても、ＡＬと別物と捉えず、自立した学びを育て記憶に残

る学びを提供すべき」「全ての生徒が学ぶ楽しさを感じることができる学習を目指す」以上、心を動かされた言葉を列挙してみました。なお、図書館運営の参考にと、素晴らしい取組みを実践されている館のご紹介を頂きましたのでご報告させていただきます。

・安来市立広瀬中学校
・雲南市立佐世小学校
・島根県立松江工業高等学校
・松江市立学校図書館支援センター（いずれも島根県）

③講義・ＷＳ：理科の学びが広い学びへとつながる支援とは

ＮＰＯ法人ガリレオ工房の滝川洋二先生の授業を実際に体験させていただきました。ガリレオ工房は、科学の楽しさを伝えるために年間通して様々な実験教室や実験ショーを行っています。科学の世界で名高い米村でんじろう先生とも活動を共にされている創造集団です。

今回の実験の一つは、ボタン電池と電球を使ったものでした。銀、銀紙、亜鉛、ケーキの上に乗っている仁丹のような銀の玉（アラザン）は、電気を通すかという実験です。最初に予測を立て、次に実際に実験してみます。迷いながらどうなるんだろうとハラハラしながら取組みました。電球が光った瞬間、会場からは驚きの喚声が上がりました。と同時に「これこそがＡＬなんだ！」と痛感しました。ＡＬの方法は様々ですが、優れた教師のＡＬは、「どうなるんだろうと迷いながら、試してみてびっくりする」考える授業だということが分かります。「考えないと覚えない」という滝川先生の言葉が深く理解できた貴重な講義でした。

④研究討議：レファレンス協同データベースを活用した実践

レファレンス協同データベース全国初参加の小学校からの報告でした。京都女子大学附属小学校の校内教職員、児童、保護者がレファレンスサービスの存在を知り、関心を寄せ、次々と図書館へ相談を寄せています。図書館サービスが、司書という職種の重要性を高めていきます。今では多くの公共図書館が積極的に協同データベースに参加しており、その重要性と便利さは言うまでもありません。ＡＬが推奨される今、学校図書館においても、レファレンスサービスを充実させていく必要があるのではと強く感じます。

⑤講義・ＷＳ：読書会スキルアップ

本校では文芸部と図書部が共同で月１回のペースで読書会を開催しています。全国ＳＬＡスーパーバイザーである長尾幸子先生がどのように読書会を進行されるのか興味があり参加させていただきました。

今回「野ばら」（小川未明）を題材にしました。６～７名のグループに分かれて進行役を決め、自己紹介の後、本の内容について一人ずつ意見を述べていきます。心に残った場面や人物について、老人と青年はなぜ仲良くなったのか、文中のフレーズについて自分が同じように感じたこととは、老人の言葉や青年の返事に込められた思いは何か、「野ばら」はどんな存在だったのか、など 11 項目の質問を制限時間内で答えていく作業はとてもハードでした。しかし、最後にグループごとの意見を聞き、この物語について更に深く考えることができました。

今回の大会では「図書館からの情報発信が授業を活かし、生徒を活かす～全教科、全職員とタイアップする図書館教育～」のテーマで研究発表をさせていただくチャンスを頂きました。当初の定員 80 名を遥かに超える参加者があり感謝しています。今後、他館での取組みを参考にさせていただきながら、更に新しいことに挑戦していきたいと考えています。

参加報告

香川県立坂出商業高等学校　実習教諭　　**内藤欣子**

８月８日（月）～８月１０日（水）に開催された「第４０回　全国学校図書館研究大会　神戸大会」に参加しました。私が参加した分科会は、講演「学校図書館をどう創るか」、講義「全国 SLA の選定と学校図書館の選書」、「書誌データの利活用」、講義・WS「心をつかむオリエンテーション」、「学校図書館の環境整備のアイディア」、実践発表「図書委員会活動を活性化する取り組み」、「学校図書館を活性化する実践」「読書活動の実践」です。特に印象に残ったのは、「学校図書館をどう創るか」というテーマでの森田盛行さんの講演です。自分が良いと思ってしていたことが、間違いだったことに気づくことができました。また、自分の学校に図書館や司書がなくてはならないものかという問いに対して、良い評価ができず、もう一度司書の仕事に対して見つめ直すきっかけになったと思います。講義・WS の「心をつかむオリエンテーション」では、隣の人と自己紹介を兼ねて、好きな本の紹介をカードに書いて交換したり、指導案を作成したりしました。図書館をアピールするために工夫して、オリエンテーションを実施するようにしようと思いました。「学校図書館の環境整備のアイディア」は、グループに分かれて「図書館新聞」を作り、新聞を活用しての展示や掲示の参考になりました。実践発表は、どの学校もいろいろな取り組みをされていました。図書委員が学年ごとにワゴンを押して出張図書館をしたり、図書室で１日だけのブックカフェを開催したりとおもしろい取り組みをしている学校もありました。

夏の暑い時期でしたが、大変貴重な３日間でした。これからの図書館活動に何か１つでも取り入れられるようにしていきたいです。

高等学校部会提案発表報告

本との出会い応援事業「ビブリオバトル」
～「読む」から「語る」へ、他者との関わりの中で育まれる読書活動～

香川県立高松東高等学校　教諭　**藤目愛美**

１　はじめに

平成２８年１１月１９日、県内の高校生を対象に第１回高校生書評合戦（ビブリオバトル）が、香川県高松市のレクザムホール５階多目的大会議室「玉藻」にて開催された。ビブリオバトルは、「人を通して本を知る、本を通して人を知る」をキャッチコピーとして、全国に広がりつつあり、そのねらいは、本の魅力を他者と共有することで、読書活動の輪を広げ、優れた本との出会いを応援しようというものだ。

今回は、そのビブリオバトルの概要や当日の様子、実際に取り組んでみての気づきを述べたい。

２　具体的実践

（１）ビブリオバトルの概要

ビブリオバトルとは、発表者（バトラー）がおすすめの本の魅力を５分で紹介しあい、参加者（発表者と観戦者）全員で『チャンプ本（一番読みたくなった本）』を投票で決める知的書評ゲームである。

（２）当日の様子と結果

当日は、県内の８つの高校から１２名の高校生がバトラーとして参加し、102 名の観戦者で賑わった。そして、投票の結果、金川珠希さん（香川県立高松桜井高校２年）が優勝し、『絶望名人カフカの人生論』がチャンプ本に選ばれた。ほか、優秀賞は鎌田翔輝さん（香川県立志度高校３年）、優良賞は田中陽奈子さん（香川県立香川中央高校１年）と藤本彩萌さん（同校１年）に決定した。優勝した金川さんは、１月に東京で開催された全国高等学校ビブリオバトル２０１６に香川県代表として出場した。

今大会において、バトラーたちの個性豊かなプレゼンテーション（プレゼン）は非常に興味深かった。例えば、優勝した金川さんの紹介した『絶望名人カフカの人生論』。タイトルどおり絶望名人すぎるカフカに対する冷静な指摘、笑いを誘うテンポのよい語り口が痛快であった。観戦者からは「発表を聞かなければ絶対に読まない、手に取らない本」だったが、発表を聞いて「この本を選んだセンスに脱帽した」という声、「絶望し切ると希望がわくということに共感できた」、「今すぐにでも買いに走り出したいくらい、引き込まれた」といった声が聞かれ、質疑応答の２分間は活発な討議の時間となった。また、準優勝した鎌田くんは『陰日向に咲く』を紹介し、自分がどれだけこの本に影響を受けたか、母とのやりとりなど自身の経験談を中心に、ユーモアたっぷりに語った。熱意あふれる身振り手振り、臨機応変な対応やアドリブが印象的で、「心を動かされた」、「あなたの読んだ本が、本当にあなたの考え方を大きく変えたのだということが、とても伝わってきて、自分も読みたくなった」、「一度読んだことがあるのに、若い鎌田くんの熱い説明を聞くともう一度読み返したくなった」といった声が聞かれた。ほかにも地元が舞台となった本について実際にそこに赴いて自身が感じたことと重ねた発表や、ホラー小説についてその怖さではなく、登場人物が持つ醜い、しかし誰もが抱きうる感情に着目して問題提起した発表など、様々な視点でのプレゼンが、決勝の舞台を盛り上げた。

（３）ビブリオバトルを実施してみて

先の観戦者のコメントにもあるように、このビブリオバトルにおいてバトラーの発表を媒介し、自分では手に取らなかった、一度読んで閉じたままであった、そんな本との出会いあるいは再会があった。また、本を「語る」ことを通して、参加者はバトラーの思いや作者の心情、問題提起を感じ取り、質疑応答の２分では語れぬほどの積極的な対話がなされた。バトラーたちは、本のどの部分を、どう切り取って、どんな言葉で、どんな語り方で、他者に表現するかを深く思案しており、特に決勝の４名は内容にも「語り」にも工夫があった。読書活動を「読む」という自己で完結しがちな内的行為で終えるのではなく、「語る」という他者を意識した外的行為までおこなうことで、昨今話題となっている表現力を包括した活動になりえていた。他者に「語る」力は、今後社会という集団に属し生きていく中で必要不可欠だ。ＳＮＳの利用増加など「語る」関係の希薄な今だからこそ、ビブリオバトルはより意味のある活動なのではないかと感じた。今後、様々なコミュニティでビブリオバトルが開かれていくことを期待したい。

（４）ビブリオバトルに参加してみて

最後に、実際参加してみての難しさを述べる。まずプレゼンの妙は選書の時点から形作られているということ。あまり読まれていない本、広く人口に膾炙している本、学生には身近だが大人には馴染みの薄い横書きの携帯小説、娯楽性の強いホラー小説、社会問題を包含した本。自分が好きだというだけでなく、なぜその本を人に読んで欲しいのかを改めて基準にしながら「相方」を決めていく必要がある。そして、今大会で最も痛感したのが、プレゼンの内容はもちろん、表情や声の抑揚、身振り手振りなど「語る」技術の必要性だ。本が魅力的なだけでは、「バトル」で人々の心は動かせない。また、発表時間は５分きっかりであり、話すスピードや内容ごとの時間配分、プレゼンのどこで何を語るのかも思案したところだ。山場を後ろに設ければ印象には残るだろうが、最悪の場合言えずに終わる危険性もある。

原稿の無い中、事前に吟味した言葉を当日自分のリズム

で「語る」。入念な準備、当日の対応力があって初めて、他者に「語る」プレゼンは意味あるものになる。そして最後に。ビブリオバトルをバトラーの成長を促す機会として効果的なものにするためには、生徒だけでなく教員の指導力が不可欠だ。教員もまた本と、そして生徒と、対話の積み重ねの先にビブリオバトルを見据えていかねばならない。

学校図書館―平成２８年・全国の動きと香川―

全国ＳＬＡ学校図書館活動推進委員
香川県ＳＬＡ顧問　**田中紘一**

１「学校図書館の整備充実に関する調査研究協力者会議」（文部科学省審議会)」（２７年６月設置、座長・堀川照代氏、委員１６名）

２８年１０月､「学校図書館の整備充実に関する調査研究協力者会議」は、８回の会議と３回の学校司書の資格養成に関する作業部会３回を終え､「これからの学校図書館の整備充実について（報告)」についての、概要と本体（３６ページ）を公表した。

（１)「学校図書館のガイドライン」の構成

学校図書館の基準については、１９５９年に文部省（当時）が定めた「学校図書館基準」がある。それにかわり、学校図書館の整備充実を図り、学校図書館の運営上の重要な事項について、教育員会や学校等に参考になるように、「学校図書館のガイドライン」を定めたものである。

①　学校図書館の目的・機能
　・読書センター、学習センター、情報センターとしての機能
②　学校図書館の運営
　・校長は学校図書館の館長としてリーダーシップを発揮、可能な限り開館
③　学校図書館の利活用
　・児童生徒の読書活動や学習活動を充実
④　学校図書館に携わる教職員等
　・司書教諭と学校司書の連携・協力
⑤　学校図書館における図書館資料
　・新たなニーズへの対応、調和のとれた蔵書構成、適切な廃棄・更新
⑥　学校図書館の施設
　・調べ学習等での利活用ができるよう施設を整備・改善
⑦　学校図書館の評価
　・外部の視点を取り入れ、評価結果などを公表

（２）学校司書のモデルカリキュラムの作成

①　学校図書館の運営・管理・サービスに関する科目（１４単位）
　・「学校図書館概論」（２）←「学校経営と学校図書館」
　・「図書館情報技術論」（２）　←司書科目
　・「図書館情報資源概論」（２）　←司書科目
　・「情報資源組織論」（２）　←司書科目
　・「情報資源組織演習」（２）　←司書科目
　・「学校図書館サービス論」（２）　←独自科目
　・「学校図書館情報サービス論」（２）　←独自科目
②　児童生徒に対する教育支援に関する科目（６単位）
　・「学校教育概論」（２）　←独自科目
　・「学習指導と学校図書館」（２）　←司書教諭科目
　・「読書と豊かな人間性」（２）　←司書教諭科目

２「学校図書館職員問題検討会」（日本図書館協会）

検討会は、２０１６年９月､「学校図書館職員検討会報告書」（２８ページ）を発表した。

①　学校図書館の使命・目的・役割
②　学校司書の歴史・現状と資質能力
③　学校司書と教職員等との役割分担と協働
④　学校司書の資格・養成・研修
⑤　望ましい学校図書館職員制度の在り方
※　養成カリキュラムは、Ａ案、Ｂ案ともに、１４科目２７単位である。

３　第４０回全国学校図書館研究大会（神戸大会）

大会主題は､「アクティブ・ラーニングを支える学校図書館の在り方」。２８年８月８日～１０日の３日間､兵庫県神戸市で、神戸学院大学、神戸国際展示場を会場に開催。

１０９の分科会が開設され､講演､講義､シンポジウム、ワークショップ、研究発表、研究討議、等が行われた。参加者は、約２，１００人。

香川県からは、佐藤会長、山本事務局長をはじめ、分科会発表者・司会者、その他、多数参加した。

詳細は､『学校図書館』（２０１６年１０月号）を。

なお、次回の「第４１回全国学校図書館研究大会」は、３０年、富山県で開催の予定。

４「２０１６ＩＡＳＬ（国際学校図書館協会）東京大会」

大会テーマは､「デジタル時代の学校図書館」。８月２２日～２６日の５日間、明治大学（東京都）を会場に開催。

基調講演（４)、研究発表（２３)、実践報告（２０)、ＷＳ〈ワークショップ〉(５)､ポスターセッション(１５)、視察（６コース）等が行われた。

詳細は､『学校図書館』（２０１７年１月号)､『図書館雑誌』（２０１６年１１月号）

５　第５次「学校図書館図書整備等５か年計画」が確定

・平成 29 年度～平成 33 年度　５か年計：約 2,350 億円
●図書整備費：約 1,100 億円
＜増加冊数分：約 325 億円　更新冊数分：約 775 億円＞
●新聞配備費：約 150 億円
　・小・中学校等：約 100 億円＜小学校等：１紙(約 50 億円）中学校等：２紙(約 50 億円)＞
　・高等学校等　：約 50 億円　＜高等学校等：４紙＞
●学校司書配置費：約 1,100 億円
＜小・中学校等の概ね 1.5 校に１名程度の配置＞

６「第２０回学校図書館を考えるつどい」

２８年９月３日（土）、高松市で開催。講師は、塩見昇先生（前日本図書館協会理事長）。「学校図書館づくりの今日的課題」は、学校図書館法の、１９９７年、２０１４年の２度の改正から出てくる課題。後のまとめの話では、学校司書の呼称の問題、研修の問題、司書教諭と学校司書の役割の違いから出てく今後の課題が語られた。

なお、香川県学校図書館協議会は、「つどい」を第２回から連続して後援している。

７　香川県における学校図書館図書標準、学校司書の配置の現状と課題

文部科学省の平成２８年度「学校図書館の現状に関する調査」の結果（平成２８年１０月１３日公表）によると、香川県の小中学校の学校図書館図書標準の達成率は、小学校 87.2%、中学校 73.5%（平成２７年度末）である。また、学校司書の配置率は、公立小学校 72.5%、公立中学校 68.7%（２８年４月１日現在）である。各々、全国平均を大きく上回っているとはいえ、県内の市町の格差は大きい。下記の、県の新規事業の結果が注目される。

◎香川県の「学校司書配置促進事業」（新規事業、予算額２，４０５万３千円）

県が学校司書の配置が進んでない４市８町を対象に、県採用の学校司書を１人ずつ計１２人、２年間（１校専任）派遣し、市町の学校司書配置の取組みを促すねらい。

・土庄小、三本松小、氷上小、大野原小、直島小・中、小豆島中、綾南中、善通寺西中、琴平中、多度津中、満濃中、詫間中（小学校５校、中学校７校、計１２校）

第６２回青少年読書感想文全国コンクール結果報告

【全国審査】

第 62 回青少年読書感想文全国コンクール（全国学校図書館協議会・毎日新聞社主催、総務省・文部科学省後援、サントリー協賛）の香川県入賞者は、下記の通りです。「書名」（出版社）

全国学校図書館協議会長賞（優良作品）

坂賀　憩　高松市立木太南小学校4年
「海は生きている」（講談社）

太田　愛翔　高松市立牟礼北小学校5年
「かあちゃん取扱説明書」（童心社）

川田　悠統　香川県立丸亀高等学校2年
「タスキメシ」（小学館）

サントリー奨励賞

合田満奈美　高松市立香東中学校3年
「生きる：劉連仁の物語」（童心社）

全国入選賞

青木　樺音　坂出市立林田小学校2年
「ひみつのきもちぎんこう」（金の星社）

石川　湊　高松市立亀阜小学校1年
「ピーターのいす」（偕成社）

山地　詠菜　多度津町立多度津小学校4年
「木のすきなケイトさん」（BL 出版）

佐伯　悠　高松市立木太南小学校6年
「茶畑のジャヤ」（鈴木出版）

土井菜月紀　観音寺市立大野原中学校3年
「吹部ノート」（KK ベストセラーズ）

西谷　直起　香川県立丸亀高等学校1年
「羊と鋼の森」（文藝春秋）

【県審査】

最優秀賞

上記全国審査入賞者と重複するので省略します。

優秀賞・優良賞

▽小学校低学年の部

〔優秀賞〕

上戸一歩希　詫間小1年／横井陽斗　氷上小1年／高鶴彩来　栗林小2年／澤井奏空　苗羽小1年／野々上光稀　白鳥小2年

〔優良賞〕

石﨑三琴　榎井小1年／白井杏　長尾小1年／鈴木我悠　垂水小2年／三宅弘晃　勝間小1年／髙井翔梧　富熊小2年

▽小学校中学年の部

〔優秀賞〕

井戸彩名　城西小3年／小片誠貴　筆岡小4年／小原新太郎　高松・中央小3年／入谷桃香　川島小3年／小野稚奈　滝宮小4年

〔優良賞〕

筒井咲稀　桑山小3年／小峠理一　長尾小4年／川畑颯也斗　本町小3年／後藤正人　牟礼小3年／土岐浩輝　榎井小4年

▽小学校高学年の部

〔優秀賞〕

鵜川敬正　古高松小5年／乾友紀野　香南小6年／吉村心壱　富熊小6年／森司紗　下高瀬小5年／長船心春　宇多津北小5年／倉片都羽　多度津小6年

〔優良賞〕

清水梓希　本山小5年／宮田愛子　一宮小5年／石川瑚子　大内小6年／中野碧　川東小6年／有住颯佑　国分寺南部小6年／佐野成美　岡田小6年

▽中学校の部

〔優秀賞〕

蓮池湧　山田中2年／辰井謙斗　太田中3年／山内理子　木太中1年／増田那奈　協和中2年／杉山千恵　三木中3年／大平拓真　丸亀・西中3年

〔優良賞〕

松本礼菜　土庄中2年／河合美瑞紀　桜町中3年／山村範勝　香川第一中2年／小西真実　綾南中3年／島田佳苗　飯山中2年／田中千恵　琴平中1年／藤田尚希　古高松中3年／小西涼菜　高松第一中2年／小野達生　高松第一中2年

▽高等学校の部

〔優秀賞〕

宇草和弥　観音寺第一高2年／藤田史歩　観音寺第一高2年／塩井皓太　高松商業高1年／秋山沙樹　高松工芸高1年

〔優良賞〕

荒井美月　高松高2年／西竹柾紀　高松高2年／福島航　高松北高2年／谷定俊輝　高松高1年／滝果音　観音寺第一高2年／山中実祐　三本松高2年

第３６回　全国高校生読書体験記コンクール結果報告

優良賞　大井健太朗　高松高等学校１年

入　選　藤田葵　高松商業高３年／宮武陽　坂出高１年／新居詩織　丸亀高２年／金関あんず　高松第一高１年

第２８回　青少年読書感想画中央コンクール結果報告

【中央審査】

奨励賞

▽小学校低学年の部

指定読書　宍戸　一妃　坂出・東部小学校３年

自由読書　藤原　悠音　城北小学校１年

安西　知弥　さぬき南小学校１年

▽小学校高学年の部

自由読書　小川　蒼代　高松・中央小学校６年

▽中学校の部　該当者無し

▽高等学校の部

指定読書　黒川菜々子　高松工芸高等学校１年

矢野　宏実　高松工芸高等学校１年

自由読書　谷住奈菜子　高松工芸高等学校２年

田村久留美　高松工芸高等学校２年

【県審査】

最優秀賞

全国審査の入賞者と重複するので省略します。

優秀賞・優良賞

▽小学校低学年の部

〔優秀賞〕

常政夏澄　福栄小３年／神木駿介　豊浜小２年／津田琴美　さぬき南小１年／小野愛紗　坂出・東部小３年

〔優良賞〕

松岡未来　城北小１年／片山菜々穂　さぬき南小１年／小川愛咲美　同１年／河津伊吹　豊浜小３年／佐藤紀代　坂出・東部小３年／堀口春陽　坂出小１年

▽小学校高学年の部

〔優秀賞〕

谷原清音　栗林小４年

〔優良賞〕

楠原杏梨　城北小５年／田中陽稀　坂出・東部小４年／黒田留奈　坂出・東部小４年

▽中学校の部

〔優秀賞〕

秋山光　丸亀・西中２年／矢野結愛　丸亀・東中１年／西愛美　丸亀・西中２年／福田沙優里　丸亀・東中２年／谷川陽香　同２年

〔優良賞〕

福田真優子　丸亀・東中２年／竹内来美　丸亀・西中２年／阿部明莉　綾歌中２年／中村紗良　多度津中２年／苧坂浩貴　満濃中２年

▽高等学校の部

〔優秀賞〕

安部智美　高松工芸高２年／木村風音　同１年／長尾真理亜　同２年／武田早紀　同１年／小早川真緒　同１年

〔優良賞〕

久保心花　高松工芸高１年／丸岡七海　同２年／高階咲希　同２年／ユー　ジョイス　同３年／見分ひなの　同３年／竹内咲凪　同１年／巾道生　同２年／船倉紅葉　同１年／宇治原奈留美　高松商業高２年／溝渕希星　高松工芸高１年／小松音々　同３年／海田ひまり　同１年／江本萌衣　高松第一高１年

最終審査には、小学校より 225 点、中学校より 74 点、高校より 112 点、計 411 点の応募がありました。前年度よりも 89 点の応募増でした。ありがとうございました。

今年度は、応募票や作画感想の不備な作品は殆どありませんでした。ご協力ありがとうございました。また、事務処理や作品返却の際に必要ですので、学校ごとに応募者一覧表を付けていただき、校内コンテストの総応募数、担当者名、自由・課題の区別などを記していただけますよう、お願いいたします。

香川県学校図書館協議会 Web ページについて

香川県ＳＬＡの Web ページにて情報提供中です。

http://sla.gr.jp/~kagawa/index.html

読書感想文コンクール・読書感想画コンクールをはじめとする学校図書館に関する県内の情報、小中高の各部会についての行事予定など、香川県の学校図書館に関する情報を当サイトから発信しています。

各校の司書教諭・図書館司書の先生方など、学校図書館に関わる全ての皆様にとって有用なサイトを目指して参ります。

また、加盟各校図書館の画像も募集中です。事務局宛にお送りいただけますと幸いに存じます。